

表 1-2. 各変数の平均と標準偏差

変数名	<i>M</i>	<i>SD</i>
教育年数	13.48	2.12
友人数	4.77	2.95
孤独感	2.35	0.83
特性自尊感情	2.82	0.55
経済的困窮感	3.26	1.04
等価世帯収入	312.81	177.77

表 2-1. うつ症状の有無についてのロジスティック回帰分析

	Model 1			Model 2			Model 3		
	<i>B</i>	<i>SE</i>		<i>B</i>	<i>SE</i>		<i>B</i>	<i>SE</i>	
切片	-1.316	0.449		-1.322	0.450		-1.311	0.449	
性別	0.299	0.131	*	0.297	0.131	*	0.302	0.131	*
年齢 (ref = 25-34)									
35-44	-0.220	0.167		-0.219	0.168		-0.224	0.167	
45-54	-0.142	0.177		-0.141	0.178		-0.145	0.177	
55-64	-0.369	0.189	†	-0.366	0.189	†	-0.368	0.189	†
教育年数	0.016	0.031		0.016	0.031		0.017	0.031	
雇用状況									
<i>C</i> ₁	0.813	0.225	***	0.822	0.242	**	0.791	0.240	**
<i>C</i> ₂	-0.139	0.174		-0.164	0.228		-0.092	0.177	
同居家族の有無	-0.454	0.138	**	-0.432	0.206	*	-0.464	0.138	**
友人数 (中心化)	-0.173	0.024	***	-0.173	0.024	***	-0.161	0.033	***
交互作用									
<i>C</i> ₁ ×同居家族				-0.017	0.484				
<i>C</i> ₂ ×同居家族				0.079	0.447				
<i>C</i> ₁ ×友人数							-0.033	0.084	
<i>C</i> ₂ ×友人数							0.075	0.060	
Deviance	1688.309			1688.277			1686.772		
Nagelkerke <i>R</i> ²	0.078			0.078			0.079		

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$.

表 2-2. うつ症状の有無についてのロジスティック回帰分析 (つづき)

	Model 4		Model 5			
	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>B</i>	<i>SE</i>		
切片	-1.271	0.450	-1.260	0.452		
性別	0.211	0.136	0.213	0.137		
年齢 (ref = 25-34)						
35-44	-0.194	0.168	-0.197	0.168		
45-54	-0.135	0.178	-0.138	0.178		
55-64	-0.308	0.192	-0.306	0.192		
教育年数	0.013	0.031	0.013	0.031		
雇用状況						
<i>C</i> ₁	0.811	0.226	***	0.806	0.238	**
<i>C</i> ₂	-0.121	0.175		-0.112	0.193	
同居家族の有無	-0.443	0.139	**	-0.445	0.139	**
友人数	-0.178	0.025	***	-0.178	0.025	***
道具的サポート	-0.212	0.151		-0.226	0.220	
情緒的サポート	0.432	0.151	**	0.514	0.212	*
交互作用						
<i>C</i> ₁ ×道具サポート				0.065	0.547	
<i>C</i> ₂ ×道具サポート				-0.101	0.419	
<i>C</i> ₁ ×情緒サポート				0.155	0.528	
<i>C</i> ₂ ×情緒サポート				0.156	0.384	
Deviance	1679.929		1679.503			
Nagelkerke <i>R</i> ²	0.085		0.085			

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$.

表 3-1. 経済的困窮感と等価世帯収入についての重回帰分析

	経済的困窮感			等価世帯収入		
	<i>B</i>	<i>SE</i>		<i>B</i>	<i>SE</i>	
切片	4.559	0.165		-52.389	27.049	
性別	-0.100	0.049	*	0.685	8.027	
年齢 (ref = 25-34)						
35-44	0.126	0.063	*	27.111	10.393	**
45-54	0.162	0.067	*	46.241	10.903	***
55-64	-0.058	0.069		49.619	11.352	***
教育年数	-0.079	0.011	***	22.037	1.839	***
雇用状況						
<i>C</i> ₁	0.511	0.098	***	-79.980	16.071	***
<i>C</i> ₂	0.466	0.063	***	-108.140	10.290	***
同居家族の有無	-0.151	0.055	**	-48.543	9.066	***
友人数	-0.033	0.008	***	4.042	1.290	**
Adj <i>R</i> ²	0.103	***		0.184	***	

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$.

表 3-2. 孤独感と特性自尊感情についての重回帰分析

	孤独感			特性自尊感情		
	<i>B</i>	<i>SE</i>		<i>B</i>	<i>SE</i>	
切片	2.298	0.135		2.269	0.089	
性別	0.120	0.040	**	-0.062	0.026	*
年齢 (ref = 25-34)						
35-44	0.038	0.052		0.038	0.034	
45-54	0.164	0.054	**	0.036	0.036	
55-64	0.031	0.057		0.090	0.037	*
教育年数	0.011	0.009		0.031	0.006	***
雇用状況						
<i>C</i> ₁	0.215	0.080	**	-0.193	0.053	***
<i>C</i> ₂	-0.036	0.051		-0.075	0.034	*
同居家族の有無	-0.412	0.045	**	0.089	0.030	**
友人数	-0.044	0.006	**	0.038	0.004	***
Adj <i>R</i> ²	0.076	***		0.079	***	

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$.

表 3-3. うつ症状の有無についてのロジスティック回帰分析 (媒介変数を含む)

	Model 1		Model 2	
	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>B</i>	<i>SE</i>
切片	-2.458	0.705	-1.511	0.623
性別	0.222	0.138	0.201	0.138
年齢 (ref = 25-34)				
35-44	-0.271	0.178	-0.219	0.178
45-54	-0.292	0.190	-0.229	0.191
55-64	-0.350	0.201 †	-0.325	0.201
教育年数	0.063	0.034 †	0.058	0.034 †
雇用状況				
<i>C</i> ₁	0.507	0.243 *	0.558	0.242 *
<i>C</i> ₂	-0.290	0.187	-0.259	0.191
同居家族の有無	-0.082	0.149	-0.113	0.149
友人数	-0.111	0.025 ***	-0.114	0.025 ***
経済的困窮感	0.209	0.069 **		
等価世帯収入			-0.001	0.000
孤独感	0.788	0.094 ***	0.816	0.094 ***
特性自尊感情	-0.864	0.131 ***	-0.896	0.131 ***
Deviance	1497.066		1504.698	
Nagelkerke <i>R</i> ²	0.229		0.224	

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$.

7 非正規雇用による不利益をいかに埋め合わせるか —生活満足度をいかに高めるかという観点から—

陸 光杰

(大阪市立大学経済学研究科 院生)

要 旨

非正規雇用の増加は単なる労働者個人の幸福度を下げただけではなく、日本全体の生産性の低下につながりかねないということが行政側でも認識されている。しかし、正規雇用から非正規雇用への移行が容易なことではない。特に中高年者の場合は正規雇用への移行がさらに困難である。本稿は非正規労働者の生活満足度を高める要因を探ることによって、非正規雇用につかざるを得ない労働者の不利益・不満を緩和するための対策を見出したい。

分析にあたっては非正規雇用労働者のうちの非自発的非正規労働者に注目し、先行研究にはない近所付き合い、親しい友人、仕事に関する変数を投入した。分析結果を踏まえ、以下のような提言ができればよい。① より安定した雇用の保障、特に職場が変わると住まいも変わらざるをえないような雇用ではなく、一つの地域に定着して生活し続けられるような雇用の保障、② 仕事の成果に対して適切な報酬の保障(報酬は給料に限らず正社員への転換なども含む)、③ 非自発的非正規労働者の自己肯定感の向上につながるような職場での積極的な承認という3点において政府そして企業が努力する必要があると考えている。

目 次

- I はじめに
- II 先行研究の整理
- III データ
- IV 推定モデルと推定結果
- V 終わりに

I はじめに

非正規労働者と正規労働者との間の賃金格差などの処遇に関する格差や雇用不安についてこれまでの研究で大いに議論されていた。賃金格差や雇用不安などの問題への対応策として、正社員への移行を促進するための雇用型訓練の導入、非正規労働者への職業訓練の強化、

NVQのような職業資格制度の構築、同一労働同一賃金の適用などが取り上げられている。

しかし、非正規から正規への移行を実現することはそう簡単ではない。自己啓発などで能力を高めるために、趣味の時間や家族・友人と一緒に楽しく過ごす時間を一定の程度で放棄する覚悟が必要である。本格的な就職活動もしくは職業訓練をしようとする場合は今の非正規雇用を辞める決心が必要である。その決心は特に低賃金で蓄えがそう多くはない非正規労働者にとってはそう容易ではないはずである。非正規雇用でひとまず安定した生活を維持してきた人たちにとって、それほどの犠牲や努力まで払わなければならないなら、現状維持のほうが幸福であると思う方たちは当然いるだろう。

そして、中途採用の場合は今までの職歴で培

った技能などが問われるため、年齢の優位性を失い、能力を十分アピールできない中高年齢の方たちには正規雇用の門戸が広くないだろう。

さらに、ジェンダーの規定により、非正規雇用で補助的な仕事をいとわない女性、あるいは出産や育児で労働市場から一定の期間で離れたため、正規の雇用になかなか結びつきにくい女性が必ず一定の割合で発生している。何といても、仮に正規雇用に結びついたとしても、生活ができる賃金が必ずしも保障されるわけではない。待っているのは低賃金と長時間労働なのかもしれない。

以上のように、正規への移行は本人の今までの効用(楽しみなど)の一部を切り捨てる覚悟、経済的な基盤(就職活動のための経費の用意)、年齢・性別・能力などの個人の属性、価値観などの要素に関わり、そう簡単に実現できるものではない。

本稿は非正規雇用労働者が労働に見合った賃金が得られ、安定した正規雇用につながるものがそう簡単ではないことを前提として、非正規雇用による不利益・不幸を埋め合わせ、生活の満足度を高めるための要因を探ることにしたい。なお、家事・育児で非正規雇用についての自発的非正規労働者の「自発」が果たして自発といえるのかは議論のあるところであるが、本稿の分析にあたって、自発的非正規労働者として分析から取り除くことにした。

II 先行研究の整理

本稿は非自発的非正規労働者の生活満足度を検証することで、非正規雇用による不幸・不利益を埋め合わせるための要因を探りたい。まず、計量分析による非正規雇用と満足度に関する先行研究を整理しておこう。非正規雇用の幸福度だけに注目した先行研究が多く存在して

いないため、失業と満足度に関する先行研究も取り上げよう。

表1は先行研究をまとめたものである。変数を見ると、どの研究においても、個人属性、住宅状況、結婚状況、年収の変数が入っている。大竹(2004)には、物価上昇感といった経済的指標もあった。先行研究の結論を見ると、それぞれ異なったデータを用いたが、概ね一致した結果になっている。すなわち、女性の満足度が男性より高く、収入や資産を多く持っている人ほど、結婚している人ほど、満足度が高い。一方で、年齢が高いほど、失業の不安を抱える人あるいは非正規雇用についている人ほど、満足度が低いということである。けれども、先行研究の分析では家族関係、友人関係、近所の人たちとの付き合いについての変数が含まれていない。また、雇用形態についての変数が入っているが、仕事内容や労働条件に関する主観的な評価などの変数が入っていない。友人関係、近所付き合いの状況、仕事に関する変数は生活全般の満足度をはかる上で極めて大事な変数と思う。本稿が用いる「大阪市民の社会生活と健康に関する調査」のデータにはそれらの変数が非常に豊富である。データ分析に入る前に、まず、友人関係、近状付き合い状況などの満足度に影響しそうないくつかの要因の実態をみておこう。

III データ

本稿で用いた「大阪市民の社会生活と健康に関する調査」のデータは代理回答を除くと、サンプル・サイズが3246になっている。そのうち、働いている人は2502人で、非正規雇用労働者(自営業と家族従業員を除く)が690人である。調査票では週に40時間以下で働いている労働者に対して短時間労働の理由を聞いたため、241人が自発的非正規雇用労働者として特

表1

先行研究の整理

鶴(2011) データ: RIETI派遣労働者の生活と求職行動に関するアンケート調査』第1回	大竹(2004) 「くらしと社会に関するアンケート」	大竹(2004) 「国民生活嗜好度調査による幸福度決定要因」	佐野・大竹(2007) 「大阪大学COE月次データ」	佐野・大竹(2007) 「くらしの好みと満足度についてのアンケート」
推計手法: 順序ロジット法	順序プロビット	順序プロビット	順序プロビット	順序プロビット
被説明変数: 幸福度	幸福度	幸福度	幸福度	幸福度
説明変数:				
男性	- 女性	+ 女性	+ 悪いニュース	- 男性
年齢	年齢	- 20-24歳	良いニュース	+ 年齢
年齢2乗	年齢2乗	+ 25-29歳	男性ダミー	- 年齢の2乗
高校卒以下ダミー	大学・大学院卒ダミー	+ 30-34歳	年齢	+ 高卒
等価世帯所得	実物資産(1千万)	+ 35-39歳	- 年齢2乗	+ 大卒
等価固定資産	世帯年収(百万)	+ 40-44歳	- 高卒	+ 院卒
地域ダミー	金融資産(千万)	+ 45-49歳	- 大卒以上	+ 失業経験
未婚ダミー	- 有配偶者ダミー	+ 50-54歳	- 農業	+ 既婚
単身世代ダミー	離死別ダミー	+ 55-59歳	- 商工・サービス	+ 離婚
子ども数	持ち家	+ 60-64歳	- 事務職	- 死別
派遣ダミー	世帯主	65-69歳	- 管理職	+ 子持ちダミー
製造業ダミー	世代主で女性	- 70歳以上	- 無職	+ 6歳以下の子持ち
雇用契約期間(日)	+ 自営業	高卒ダミー	+ 対数年収	+ 健康
製造業派遣ダミー	危険回避度	- 大卒ダミー	+ 他人を気にする	- 宗教を熱心に信仰する
日雇い派遣ダミー	昨年所得増加率	有配偶ダミー	+ 公務員ダミー	+ 自営業ダミー
週当たり労働時間	昨年消費増加率	離死別ダミー	+ 公務員ダミー	- パートダミー
非自発的非正規雇用ダミー	+ 将来予想所得上昇率	+ 対数実質世帯所得	+ 自営業ダミー	- 失業ダミー
労働災害経験ダミー	将来予想物価上昇率	持ち家	+ パートダミー	- 非労働力ダミー
	失業	- 失業不安	- 失業ダミー	- 危険回避度
	失業経験	- 不平等あり	- 非労働力ダミー	- 時間割引率
	失業不安	- 所得上昇	+ 危険回避度	- 対数家計所得
		+ 物価上昇感	- 時間割引率	+ 対数家計所得
		+ 健康	- 時間割引率	
		- ストレス	+ 対数家計所得	
		+ 失業率		
		- 失業率2乗		
		+ インフレ率		
		- インフレ率2乗		

注: +と-は有意な係数の符号をあらわすものである。空欄の場合は対応している説明変数が有意ではないことを意味する。

定でき分析から除外した。しかし、40時間以上の労働をしている非正規労働者の非正規就労の理由を調査票から知ることができなかった。したがって、分析に用いた449の非正規雇用労働

者のデータは全部が非自発的非正規雇用労働者のものではない。そのうちの235人分のデータのみが非自発的非正規雇用労働者として特定できた。ここで、まず記述的に満足度に影響する要因を見ておこう。なお、ここでの満足度は生活全般の満足度を指す。以下は生活満足度を略称する。

まず、近所付き合いによる生活満足度の影響をみよう。表2-表3は生活満足度と近所付き合いとの関係をあらわすクロス表である。近所付き合いがよければよいほど、地域に馴染んでいるほど、生活の満足度がそうでない場合と比較して高い傾向がみられる。

表4-表5は友人関係と生活満足度とのクロス表である。調査票では親しい友人の基準について定義されていないため、かなり主観的な回答になっているが、表4は多くの友人を有する人ほど生活満足感が高いことを示唆している。

表6は友人や家族などからの精神的・感情的なサポートと生活満足度との関連を示したものである。設問には「過去6ヶ月の間に」という時間の制限があるためか、過去6ヶ月の間に精神的・感情的なサポートのありなしは生活満足度への影響が不明瞭である。

図1は仕事に関する主要な変数をピックアップした図である。横軸は各変数にあてはまる人々のグループである。縦軸は各グループごとに生活全般が満足していると回答した人の割合である。いずれの変数においても、肯定的なグループ(変数)に所属している人たちのほうが、生活満足度が高いとみてとれる。例えば、職業訓練の機会が提供されていると思

っているグループの人々のほうが、職業訓練の提供が不十分だと思っているグループの人たちより生活満足度が高いことがわかった。

「職業上の達成感」と「社会貢献」は仕事に対する誇りをあらわす変数である。収入や職場における発言力において往々にして不利益を蒙っている非自発的非正規雇用労働者にとっては今の従事している仕事に対する誇りを持つことが生活の満足度を高めるキーポイントになるだろう。

なお、「大阪市民の社会生活と健康に関する調査」では、自尊感情についての設問が設けられたため、ここで取り上げたい。結果は表7に示されている。自己肯定感を持っている人々のほうが、生活満足度が高いことがわかった。

以上では、生活満足度と関連のありそうな友人関係・近所付き合い・仕事に関する変数を取り上げて、記述的に見てきた。第IV節では、個人の属性をコントロールしたうえで、非自発的非正規労働者の生活満足度の規定要因を探りたい。

IV 推定モデルと推定結果

ここでは、順序ロジット法を用い、生活満足度の規定要因を探りたい。調査票では4段階で生活満足度をはかった。推定した際、調査票の選択肢の順番を反転させた。つまり、「満足していない=1」、「どちらかといえば満足していない=2」、「どちらかといえば満足している=3」、「満足している=4」になっている。表8は基本統計量を示している。

表2 近所付き合いと生活満足度 (%)

	生活満足度		合計
	不満	満足	
近所との関係がよい	18.75	81.25	100
近所との関係がまあまあよい	25.83	74.17	100
近所との関係がやや悪い	50	50	100
近所との関係が悪い	33.33	66.67	100
仲がいい人もいれば悪い人もいる	42.27	57.73	100
付き合いがない	37.97	62.03	100
合計	33.63	66.37	100

表3 地域への馴染みの度合いと生活満足度 (%)

	生活満足度		合計
	不満	満足	
地域住民が自分と似ていない	37.73	62.27	100
地域住民が自分と似ている	27.49	72.51	100
合計	33.78	66.22	100

表4 親しい友人数と生活満足度 (%)

	生活満足度		合計
	不満	満足	
親しい友人が1人いる	53.33	46.67	100
親しい友人が2-6人いる	31.85	68.15	100
親しい友人が10人以上いる	25.33	74.67	100
親しい友人がいない	59.46	40.54	100
合計	33.79	66.21	100

表5 友人関係と生活満足度 (%)

	生活満足度		合計
	不満	満足	
友人関係に不満	76.92	23.08	100
友人関係に満足	26.11	73.89	100
合計	33.48	66.52	100

表6 精神的なサポートと生活満足度 (%)

	生活満足度		合計
	不満	満足	
精神的・感情的なサポートがない	35.9	64.1	100
精神的・感情的なサポートがある	30.1	69.9	100
合計	33.18	66.82	100

図1 変数ごとに「生活が満足している」と回答した人の割合

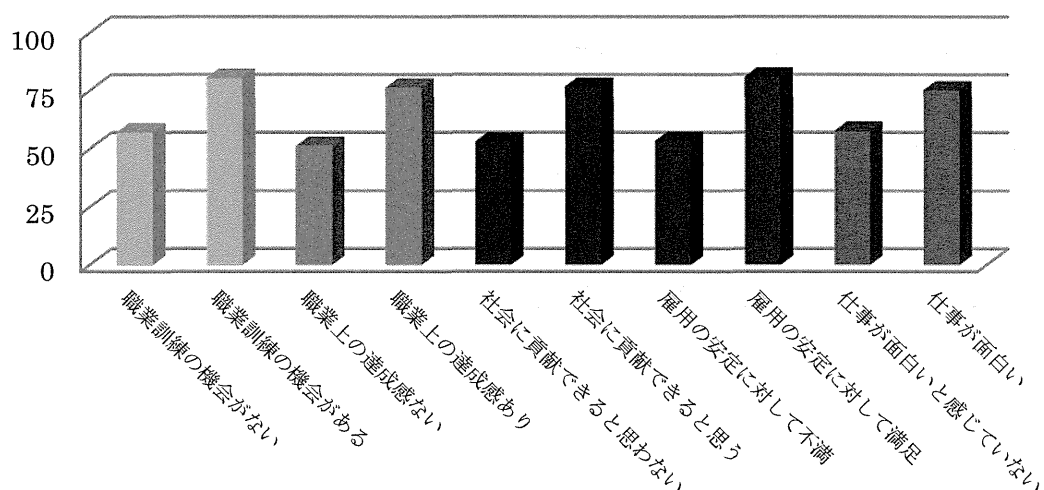


表7 自尊感情と生活満足度 (%)

	幸福度		合計
	不満	満足	
自分が人並みに価値のある人間だと思わない	49	51	100
自分が人並みに価値のある人間だと思う	29.23	70.77	100
合計	33.63	66.37	100

表8 基本統計量

変数	観測数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
生活全般の満足度(不満1から満足4の4段階)	449	2.757	0.869	1	4
家族関係満足度(満足=1)	447	0.841	0.366	0	1
友人関係満足度(満足=1)	448	0.855	0.353	0	1
性別(男性=1)	449	0.394	0.489	0	1
持ち家	447	0.468	0.500	0	1
年齢	449	45.472	12.347	25	64
年齢2乗	449	2219.833	1119.523	625	4096
高卒以下ダミー	447	0.506	0.501	0	1
短大・専門学校ダミー	447	0.282	0.450	0	1
大学・大学院ダミー	447	0.213	0.410	0	1
卒業状況(卒業=1)	441	0.898	0.303	0	1
未婚ダミー	449	0.381	0.486	0	1
既婚ダミー	449	0.445	0.498	0	1
離死別ダミー	449	0.174	0.379	0	1
一人暮らし	449	0.243	0.429	0	1
団体や町内会等への参加	420	0.410	0.492	0	1

続き

暮らし向きがよいダミー	443	0.122	0.328	0	1
暮らし向きが普通ダミー	443	0.391	0.488	0	1
暮らし向きが苦しいダミー	443	0.488	0.500	0	1
本人年収(0-240万未満)ダミー	435	0.660	0.474	0	1
本人年収(240-480万未満)ダミー	435	0.285	0.452	0	1
本人年収(480万以上)ダミー	435	0.055	0.229	0	1
世帯年収(0-240万未満)ダミー	338	0.322	0.468	0	1
世帯年収(240-480万未満)ダミー	338	0.423	0.495	0	1
世帯年収(480万以上)ダミー	338	0.254	0.436	0	1
失業不安	434	0.406	0.492	0	1
危険回避度(調子がおかしくとすぐ服薬=1)	449	0.465	0.499	0	1
近所との関係がよいダミー	449	0.071	0.258	0	1
近所との関係がまあよいダミー	449	0.336	0.473	0	1
近所との関係がやや悪いダミー	449	0.018	0.132	0	1
近所との関係が悪いダミー	449	0.007	0.082	0	1
仲がいい人もいれば悪い人もいる	449	0.216	0.412	0	1
近所との付き合いがない	449	0.352	0.478	0	1
地域住民と自分が似ているか(似ている=1)	444	0.385	0.487	0	1
現在の住まいに住んだ年数	448	14.931	13.259	0	61
現在の地域に住んだ年数	448	19.478	15.402	0	63
精神的・感情的なサポート(あり=1)	440	0.468	0.500	0	1
友人数(1人)ダミー	441	0.034	0.181	0	1
友人数(2-6人)ダミー	441	0.712	0.453	0	1
友人数(10人以上)ダミー	441	0.170	0.376	0	1
友人がいないダミー	441	0.084	0.278	0	1
自分が人並みに価値のある人間(そう思う=1)	449	0.777	0.417	0	1
週あたり労働時間	445	36.172	13.263	4	80
給料の満足度(満足=1)	443	0.343	0.475	0	1
雇用の安定(満足=1)	441	0.465	0.499	0	1
仕事上の能力開発の機会(満足=1)	438	0.384	0.487	0	1
仕事の面白さ(感じている=1)	443	0.483	0.500	0	1
能力発揮(満足=1)	443	0.571	0.495	0	1
仕事上のイニシアティブを取る機会(満足=1)	429	0.429	0.495	0	1
職業上の達成感の獲得(満足=1)	439	0.585	0.493	0	1
仕事の社会貢献度(満足=1)	438	0.548	0.498	0	1
仕事のストレス(感じている=1)	442	0.647	0.478	0	1
仕事の疲労(感じている=1)	442	0.654	0.476	0	1

表 9 は順序ロジット法による推定結果である。モデル 1 では先行研究に合わせて変数を投入した。年齢は 10%水準で有意ではないが、15%水準で有意である。世帯年収については年収が高いほど生活満足度が高いという先行研究と一致した結果を得ている。ただし、鶴

(2011)以外の先行研究では用いられたデータが非正規雇用者に限定しておらず、高学歴者ほど幸福度が高いという結果であるが、本稿は非自発的非正規雇用労働者(一部の自発的非正規労働者を含んでいる)のサンプルに限定した結果、大学・大学院卒者は高卒以下の労働者より

生活満足度が低い結果を得た。

モデル2では先行研究になかった近所付き合いに関する変数と友人関係に関する変数を投入した。近所の人との仲が良ければよいほど、生活満足度が高くなると想定したが、残念ながら、近所付き合いは生活満足度に影響しない結果が出た。近所との付き合いがあると、近所の人に気を使わなければならないため、生活満足度が逆に下がる可能性もあろう。一方、地域での生活に馴染んでいるかどうかを測る変数として、「現在の住まいに住んだ年数」が有意な結果が出ている。同じところに長く住めば住むほど、そのところの雰囲気に馴染み、安心感が生まれ、生活満足度が高まるであろう。

親しい友人数に関する変数については、親しい友人がいる、あるいは多ければ多いほど生活満足度が高まると想定したが、概ね有意な結果が得られなかった。また、過去6ヶ月の間に他人からの精神的・感情的サポートのあるなしは有意ではない。過去6ヶ月という限定があったためであろう。なお、今回の調査では自尊感情に関する設問が設けられたため、「自分が人並みに価値のある人間だと思うかどうか」という変数を投入した。自分が人並みに価値のある人間だと思う人、すなわち、自己肯定感を持っている人ほど生活満足度が高いことがわかった。

モデル3はフルモデルである。近所付き合いや友人関係のほかに、仕事に関するいくつかの変数を入れた。そのうち、「雇用の安定」と「職業上の達成感の獲得」は有意である。非自発的非正規労働者にとっては雇用の安定がいかに重要なものであるかがここだろうか。仕事上の誇りをあらわす変数の一つである「職業上の達成感の獲得」についてはマイナスの有意になっている。仕事がよくできているにもかかわらず、成果に見合った収入が得られないため、生活満足度が下がると解釈できるだろう。

モデル4は近所付き合いと友人関係に関する

変数を除き、仕事上の諸変数に注目したモデルであるが、モデル3とほぼ同じ結果になっている。

世帯年収の設問に対して未回答者が多かったため、サンプル・サイズは499より約100ぐら小さくなった。サンプル・サイズをなるべく大きくするため、世帯年収の変数をモデルから取り除いてみた。取り除いた後の推定結果は表10で示されている。今までの推計とほぼ同様な結果を得た。ただ、持ち家に住んでいる人ほど生活満足度が高いという結果を新たに得た。それは先行研究と一致している。また、仕事に関する変数として、「仕事の面白さを感じている」が有意な結果になっている。雇用の安定以外に仕事の面白さも生活満足度の向上に寄与することを示唆している。

ただ、注目したい「能力開発の機会の提供」という変数はいずれのモデルでも有意な結果を得られなかった。能力開発の機会があったからといって、昇進あるいはより高度な仕事が任せられることがないかもしれないという現実があるため、非自発的非正規労働者にとって十分な能力開発の機会の提供が生活満足度に影響しないという結果になっただろう。あるいは、職場に提供されている能力開発の機会が一定レベルにとどまり、今の従事している仕事には直接に役に立つかもしれないが、将来のキャリアアップにつながるような内容のものではないため、生活満足度に影響を与えないという解釈もできるだろう。

被説明変数:生活全般満足度	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
家族関係満足度	1.214	348***	1.223	368***	1.221	388***	1.149	366***
友人関係満足度	1.702	362***	1.902	428***	1.795	460***	1.597	388***
性別(男性=1)	.071	.290	.156	.313	.249	.346	.123	.317
持ち家	.238	.268	.290	.293	.385	.309	.315	.285
年齢	-.148	.092	-.164	.099*	-.167	.105	-.173	.097*
年齢2乗	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.002	.001
短大・専門学校(ref.高卒以下)	-.098	.300	-.020	.317	-.150	.341	-.248	.319
大学・大学院	-.565	.335*	-.485	.358	-.488	.393	-.633	.359*
卒業状況(卒業=1)	.216	.360	-.151	.383	-.208	.407	.121	.380
既婚ダミー(ref.未婚)	-.040	.333	.187	.381	.216	.393	.046	.348
離死別ダミー	-.021	.416	.050	.455	.146	.474	.098	.431
一人暮らし	.138	.334	.220	.375	.435	.394	.372	.350
団体や町内会等への参加	.349	.254	.452	.283	.291	.302	.187	.270
暮らし向きがよいダミー(ref.苦しい)	1.316	.455***	1.352	.488***	1.009	.531*	.896	.490*
暮らし向きが普通ダミー	1.515	.298***	1.383	.319***	1.231	.342***	1.364	.317***
本人年収(240-480万未満)ダミー(ref.240万未満)	.147	.348	.025	.373	.079	.412	.162	.378
本人年収(480万以上)ダミー	-.103	.635	-.308	.661	-.652	.736	-.449	.693
世帯年収(240-480万未満)ダミー(ref.240万未満)	.359	.369	.229	.400	.273	.430	.365	.390
世帯年収(480万以上)ダミー	.865	.494*	.634	.536	.751	.582	.963	.532*
失業不安	-.154	.258	-.213	.284	.058	.310	.201	.285
危険回避度	-.340	.239	-.333	.256	-.366	.271	-.388	.252
近所との関係がよいダミー(ref.付き合いがない)			-.006	.598	-.011	.640		
近所との関係がまあよいダミー			-.516	.352	-.506	.378		
近所との関係がやや悪いダミー			-1.324	.878	-1.194	.890		
近所との関係が悪いダミー			.528	1.524	.829	1.554		
仲いい人もいれば悪い人もいる			-.548	.356	-.316	.378		
地域住民と自分が似ているか(似ている=1)			.373	.268	.182	.282		
現在の住まいに住んだ年数			.034	.016**	.040	.017**		
現在の地域に住んだ年数			-.015	.014	-.020	.015		
精神的・感情的なサポート(あり=1)			-.248	.276	-.256	.295		
友人数(1人)ダミー・(ref.いない)			-1.254	.757*	-.622	.812		
友人数(2-6人)ダミー			-.177	.530	.261	.597		
友人数(10人以上)ダミー			.164	.613	.627	.682		
自分が人並みに価値のある人間(そう思う=1)			1.116	.320***	1.059	.345***		
週あたり労働時間					-.004	.012	-.003	.011
給料の満足度(満足=1)					.175	.332	.113	.298
雇用の安定(満足=1)					.936	.332***	.874	.313***
仕事上の能力開発の機会(満足=1)					-.174	.363	-.106	.340
仕事の面白さ(感じている=1)					.405	.307	.362	.286
能力発揮(満足=1)					.047	.383	.265	.355
仕事上のイニシアティブを取る機会(満足=1)					.224	.364	.284	.344
職業上の達成感の獲得(満足=1)					-.688	.414*	-.754	.391*
仕事の社会貢献度(満足=1)					.465	.349	.460	.323
仕事のストレス(感じている=1)					-.240	.341	-.425	.326
仕事の疲労(感じている=1)					.042	.328	.083	.315
対数尤度	-298.003		-272.794		-253.677		-277.170	
擬似決定係数	.196		.241		.270		.227	
サンプル・サイズ	.292		.282		.273		.283	
カイ2乗	145.35***		173.12***		187.69***		163.15***	

注:***,**,*はそれぞれ1%、5%、10%の水準で有意であることを示す。また、世帯収入の未回答者が多かったため、サンプル・サイズが449よりかなり小さくなった。

表10

モデル 5

被説明変数:生活全般満足度	係数	標準誤差
家族関係満足度	1.417	346***
友人関係満足度	1.903	410***
性別(男性=1)	.268	.295
持ち家	.472	.266*
年齢	-.146	.091
年齢2乗	.001	.001
短大・専門学校(ref.高卒以下)	-.141	.295
大学・大学院	-.399	.322
卒業状況(卒業=1)	-.235	.373
既婚ダミー(ref.未婚)	.312	.332
離死別ダミー	-.235	.387
一人暮らし	.450	.329
団体や町内会等への参加	.317	.265
暮らし向きがよいダミー(ref.苦しい)	1.463	444***
暮らし向きが普通ダミー	1.532	292***
本人年収(240-480万未満)ダミー(ref.240万未満)	.033	.293
本人年収(480万以上)ダミー	-.428	.579
失業不安	.034	.266
危険回避度	-.223	.233
近所との関係がよいダミー(ref.付き合いがない)	-.117	.548
近所との関係がまあよいダミー	-.518	.316
近所との関係がやや悪いダミー	-.667	.798
近所との関係が悪いダミー	.617	1.222
仲いい人もいれば悪い人もいる	-.231	.335
地域住民と自分が似ているか(似ている=1)	.254	.240
現在の住まいに住んだ年数	.032	.014**
現在の地域に住んだ年数	-.016	.012
精神的・感情的なサポート(あり=1)	-.062	.250
友人数(1人)ダミー(ref.いない)	-.906	.718
友人数(2-6人)ダミー	-.090	.498
友人数(10人以上)ダミー	-.058	.570
自分が人並みに価値のある人間(そう思う=1)	.899	296***
週あたり労働時間	-.008	.010
給料の満足度(満足=1)	.298	.279
雇用の安定(満足=1)	.694	288**
仕事上の能力開発の機会(満足=1)	.072	.307
仕事の面白さ(感じている=1)	.588	264**
能力発揮(満足=1)	.097	.336
仕事上のイニシアティブを取る機会(満足=1)	-.038	.307
職業上の達成感の獲得(満足=1)	-.627	350*
仕事の社会貢献度(満足=1)	.407	.305
仕事のストレス(感じている=1)	-.386	.297
仕事の疲労(感じている=1)	.197	.281
対数尤度	-323.203	
擬似決定係数	.257	
サンプル・サイズ	347	
カイ2乗	223.28***	

注:***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%の水準で有意であることを示す。

V 終わりに

本稿は先行研究を踏まえ、非自発的非正規労働者に限定したサンプル(うちの約 200 人は非自発であるかどうかを判別できなかった)を用い、生活満足度を影響する要因を探った。

収入、職場における発言力、他人による承認などにおいて不利益を蒙っている多くの非自発非正規労働者の生活満足度をいかに高めるかを見出すことが目的である。サンプル・サイズは 449 と小さいが、先行研究にない変数を投入し、いくつか興味深い結果を得た。

まず、地域への馴染みの程度をあらわす変数の一つである「今の住まいに住んだ年数」は有意な結果になっている。一つの地域で長く住むことにより、安心感が生まれ、生活満足度が高まることが示唆されている。一方、「近所の人との関係」は生活満足度に影響を与えない結果が出た。また、親しい友人があるかないか、あるいは親しい友人の人数は生活満足度に影響しないという結果を得た。

仕事に関する諸変数は「雇用安定」、「仕事の面白さ」、「職業上の達成感」が有意な結果が出た。「雇用の安定」は非自発非正規労働者にとっていかに重要であるかを物語っている。「仕事の面白さ」も有意なプラス効果になっている。収入、昇進などにおいて不利であっても、仕事自体が自分にとって面白ければ、生活満足度が高まるということが読み取れる。仮に非正規雇用につかざるを得ないという状況にあっても、自分にとって面白い仕事を選んだほうが、満足度の向上につながるということがわかった。

「職業上の達成感」については、仕事に対して誇りが持てば雇用形態と関係なしに生活満足度が高まると想定したが、マイナスの有意であった。仕事がよくできているにもかかわらず、収入の面などで報われていないことによる不満で、生活全般の満足度を下げたのであろう。

そして、注目したい変数である「能力開発の機会の提供」が有意な結果が出なかった。能力開発の機会があったからといって、昇進あるいはより高度な仕事が任せられることにつながらないかもしれないという現実があるなかで、十分な能力開発の機会の提供が非自発的非正規労働者の生活満足度に影響しないということになるだろう。あるいは、職場より提供されている能力開発が一定程度のレベルにとどまり、今の従事している仕事には直接に役に立つかもしれないが、将来のキャリアにつながるような内容のものではないため、生活満足度に影響を与えないという解釈もできるだろう。

なお、自己肯定感を持っている人ほど、生活満足度が高いという結果を得た。

以上の推定結果を踏まえて、非自発的非正規労働者の生活満足度を高めるためには、① より安定した雇用の保障、特に職場が変わると、住まいも変わらざるをえないような雇用ではなく、一つの地域に定着して生活し続けられるような雇用の保障、② 仕事の成果に対して適切な報酬の保障(報酬は給料に限らない。正社員への転換なども含む)、③ 非自発的非正規労働者の自己肯定感の向上につながるような職場での積極的な承認という 3つの点において政府そして企業が努力する必要があると考えている。

参考文献

岩田克彦・上西充子(訳)(2012)『若者の能力開発、働くために学ぶ：OECD 職業教育訓練レビュー 統合報告書』 明石書店

大竹文雄(2004)「失業と幸福度」『日本労働研究雑誌』 No.528、pp.59-68

厚生労働省(2012)『非正規雇用労働者の能力開発抜本強化に関する検討会報告書』

佐野晋平・大竹文雄(2007)「労働と幸福度」『日本労働研究雑誌』 No.558、pp.4-18

鶴光太郎(2011)「非正規雇用問題解決のための鳥瞰図：有期雇用改革に向けて」(鶴光太郎・樋口美雄ほか『非正規雇用改革－日本の働き方をいかに変えるか』日本評論社、2011年)

守島喜博(2011)「多様な正社員と非正規雇用」(鶴光太郎・樋口美雄ほか『非正規雇用改革－日本の働き方をいかに変えるか』日本評論社、2011年)

山本勲(2011)「非正規労働者の希望と現実－不本意型非正規雇用の実態」(鶴光太郎・樋口美雄ほか『非正規雇用改革－日本の働き方をいかに変えるか』日本評論社、2011年)

8 生活保護受給者の社会的孤立

関西学院大学社会学部 准教授

長松奈美江

研究要旨

本稿では、生活保護受給の背景にある社会的・経済的要因を踏まえたうえで、生活保護受給者の社会的孤立の状況について、分析した。分析の結果、第一に、生活保護受給者の様々な特徴が明らかになった。生活保護受給を従属変数とした二項ロジット分析を行った結果、生活保護を受給しているかどうかには、低学歴であることが強い効果をもっていることがわかった。また、15歳の頃の父親の仕事が「わからない」者、大人からひどい扱いを受けたり、経済的な困窮状況を経験した者が生活保護を受ける確率が高いこともわかった。第二に、生活保護受給者が社会的に孤立していることがわかった。生活保護受給者は、親しい友人の数が少なく、組織に参加していない者が多く、強い孤独感を感じていた。友人数、組織への参加、孤独感を従属変数としたロジット分析によれば、生活保護受給の背景にある社会的・経済的要因、孤立状態をもたらす様々な要因をコントロールしても、生活保護を受給していることそれ自身が、孤立状況を高めていることがわかった。

1. 問題設定—生活保護受給と社会的孤立

本稿では、生活保護受給者の社会的孤立 (social isolation) について、明らかにする。厚生労働省の発表(「被保護者調査」)によると、2013年1月の生活保護受給者は215万3,642人、受給世帯数は157万2,960世帯であり、いずれも過去最多を記録し続けている¹。また、2010年度の世帯保護率は2.9%、世帯人員保護率は1.5%であり²、いずれも1990年代後半以降、上昇し続けている。

生活保護受給者の増加を受けて、生活保護に関する報道が多くなされるようになった。ただ

し、その報道の内容は、生活保護受給者が増加していることを問題視し、これ以上受給者が増加しないように、不正受給の事例を過度に取り上げたり、受給者を就労へと追い立てたりするようなものが多い。このようななかで、生活保護受給者へのバッシングがなされ、受給者の生活を市民が「監視」することが提案されるようになった。このように、生活保護を受給している人びとと、受給していない人びとの間には、断絶がある。このような断絶がある社会のなかで、生活保護受給者は孤立しているのではないかと考えられる。

社会から孤立することは、受給者にとって望ましいことではない。孤立することによって、人付き合いから疎遠になってしまい、新たな人間関係を築くことが難しくなってしまう。家に引きこもってしまったり、新しい仕事が見つからなくなったりして、受給が長期化する可能性もある。本稿では、生活保護を受給して

¹ <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/74-16.html> (2013年5月19日取得)

² 国立社会保障・人口問題研究所、「生活保護」に関する公式統計データより (<http://www.ipss.go.jp/s-info/j/seiho/seiho.asp>、2013年5月19日取得)。

いる背景を踏まえつつ、受給者が社会的に孤立しているのかどうか、また、どの程度孤立しているのかを、大阪市民を対象に実施された社会調査データを分析することによって、明らかにしたい。生活保護を受けている人は低学歴であったり、家庭環境が恵まれていなかったりなど、受給の背景には、多くの社会的・経済的要因がある。そのような要因をコントロールしても、生活保護を受けることが孤立を高めているのかを明らかにする。

以下では、2 節で、生活保護受給の背景にある要因と、受給者の社会的孤立について先行研究を整理して、本稿の分析課題を明確にする。3 節でデータと変数の説明をした後、4 節で分析を行う。5 節では、分析結果をもとに、生活保護受給者がどのように孤立しているのか、孤立を防ぐにはどのような方策が必要なのかを議論する。

2. 先行研究—生活保護受給の背景と受給者の社会的孤立

2-1. 生活保護受給の背景

どのような人が、生活保護を受給しているのだろうか。この節では、受給者の属性と生まれ育った家庭環境に注目して、先行研究をまとめる。まず、生活保護受給者の基本的な属性について押さえておこう。2010 年度の保護世帯数を世帯類型別にみると、高齢者世帯が 60 万 3,540 世帯 (42.9%)、母子世帯が 10 万 8,794 世帯 (7.7%)、傷病・障害世帯が 46 万 5,540 世帯 (33.1%)、その他世帯が 22 万 7,407 世帯 (16.2%) である。世帯業態別にみると、稼働世帯(世帯主あるいは世帯員が働いている世帯)は 18 万 6,748 世帯(13.3%)、非稼働世帯は 121

万 8,533 世帯 (86.7%) である³。

以上より、生活保護受給世帯には高齢や傷病・障害世帯が多いこと、また世帯主や世帯員が働いていない、非稼働世帯が多いことがわかる。ただし、世帯主が稼働年齢層である「その他世帯」も、全体の 16.2%と、少なくない割合を占めている。「その他世帯」は、近年増えていることが特徴的である。また、生活保護受給世帯のなかに占める割合は 7.7%と大きくはないが、母子世帯の生活保護受給率は高い。厚生労働省による「平成 23 年度全国母子世帯等調査」によれば、母子世帯のうち生活保護を受給している割合は 14.4 %である⁴。

政府によって公表されるデータからわかることは、世帯の類型や就業状況など、きわめて基本的な属性に限られている。一方、研究者が独自に行った調査からは、生活保護受給者の属性や家庭環境について明らかにされている。いくつかの研究においては、生活保護受給者の学歴が低いことが指摘されている。道中(2007, 2009)が実施した調査によれば、保護受給世帯のうち世帯主が中卒の世帯は 58.2%、高卒の世帯は 14.4%であり、受給者の学歴がきわめて低いことが指摘されている。また、藤原・湯澤(2010)によれば、生活保護を受給する母子世帯の母の約半数は、就労機会が極めて制約される中卒(中卒・高校中退)の学歴しか有していない、という。

では次に、受給者が生まれ育った家庭環境についてみてみよう。以下の二点を指摘することができる。第一に、受給者が生まれ育った家庭でも生活保護を受けていた割合が高いことであ

³国立社会保障・人口問題研究所、「生活保護」に関する公式統計データより

(<http://www.ipss.go.jp/s-info/j/seiho/seiho.asp>、2013 年 5 月 19 日取得)。

⁴http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-katei/boshi-setai_h23/ (2013 年 5 月 19 日取得)

る。道中（2009, 2007）によると、受給世帯においては、貧困が親から子へと次世代に引き継がれているという。道中が実施した調査によれば、生活保護を受給する世帯の世帯主が、過去に生育した家庭でも保護を受けていたことが確認された世帯は、全体の 25.1%であり、高齢者世帯を除くと 28.8%と高率であるという。また、労働政策研究・研修機構が 2012 年に実施した「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査」⁵でも、親世代が生活保護を受給している場合、その子ども世代が成人後に生活保護を受給する割合が高いことが指摘されている。生活保護受給世帯に育ったということは、子ども時代に貧困であったことも意味している。

第二に、受給者は、親との離死別の経験、親の借金、DV など、さまざまな社会的・経済的困難を子ども時代に経験していることが指摘されている。藤原・湯澤（2010）は、母子の生活保護受給世帯を対象とした調査において、成育過程において親との離死別を経験している世帯も少なくないこと、借金、DV など、さまざまな困難を経験していることを指摘している。

2-2. 生活保護受給者の社会的孤立

では次に、生活保護受給者の社会的孤立について、先行研究を整理しよう。近年、主に欧州で展開される社会的排除論研究のなかで、失業や貧困、公的扶助受給と社会的孤立との関係が分析されてきた。社会的排除論は、失業の長期化、フルタイム雇用の減少、貧困の拡大、またこれらの問題に対する福祉国家の失敗、という文脈のなかで登場した。社会的排除は、福祉国

家（特に社会保険）、社会（中間集団）、経済（特に雇用）におけるメンバーシップの喪失として捉えられている。また、その喪失が長期にわたり、さまざまな領域での排除が積み重なるような、排除の動的で多次的な側面を捉えるために生み出された概念でもある。1970 年代以降、公的扶助の受給者の増加が顕著となり、特に給付の長期間の受給、ないしは依存が、社会的排除の一つの様相としてとらえられるようになった（菊池 2007）。

社会的排除は、経済的脆弱さ、多次的な剥奪、社会的凝集性など、様々な視点から捉えられ（Whelan and Maître 2005）、貧困者、失業者、公的扶助受給者などが社会的に排除されているかどうか、分析されてきた。Gallie et al.（2003）は、労働市場において周辺的な立場にあること（失業状態にあること）は、貧困と社会的孤立をもたらし、さらにそのことが、失業を長期化させると述べている。Whelan and Maître（2010）は社会階級と経済的脆弱さとの関係が福祉レジームによって異なるかどうかを分析している。

日本においても、公的扶助受給者や貧困者の社会的排除の状況について、研究がなされている。菊池（2007）は、①福祉国家からの排除、②経済活動からの排除、③社会／中間集団からの排除という 3 つの領域の排除に注目し、排除されている者の特徴を探るための探索的分析を行っている。その結果、生活保護受給世帯の一部は、過去 1 年間にライフラインの停止や家賃の滞納といった極度の排除・剥奪を経験していることが示されている。しかし、菊池のデータには生活保護受給世帯が 6 ケースしか含まれず、結果を一般化することはできない。阿部（2010）は、低所得層と生活保護受給層との比較を行い、被保護世帯は低所得世帯に比べてすべてのウェル・ビーイング指標（生活不満足、生活程度、社会的必需項目の欠如、社会参加、社会関係）

⁵

<http://www.jil.go.jp/institute/research/2013/109.htm>（2013 年 5 月 19 日取得）

においてウェル・ビーイングが低いことを示している。社会参加や社会関係に関しては、生活保護受給者の参加度が低く、また乏しい社会関係しか持っていない。ここからは、生活保護受給者にとって、社会に参加したり、豊かな社会関係を持つことに対して障壁があることが示されている。しかしながら、低所得層と生活保護受給層との比較は記述的なものにとどまっている。一方、青木編（2003）によって行われたケースワーカーへの聞き取り調査でも、母子受給世帯の母親は社会的スキルが不足しており、近所づきあいを避ける傾向にあり、仕事経験が浅いことが指摘されている。

以上、生活保護受給者の属性と家庭環境、社会的孤立についての先行研究を整理してきた。日本においては、政府が公表する公式データでは受給者について得られる情報が限られている。また、生活保護受給者にアクセスすることが難しいため、生活保護受給者を対象にした量的調査も多くはない。一方、社会的排除論の研究において、失業者や公的扶助受給者が社会的に排除されているかどうか分析されてきた。しかし、日本においては生活保護受給者の社会的孤立に注目した研究は少なく、生活保護受給者と受給者以外の比較も十分なされていない。

では、実際に、生活保護受給者は社会的に孤立しているのだろうか。受給者が持つ、様々な不利な背景的要因をコントロールしても、生活保護を受給していること自体が、社会的孤立をもたらしているのだろうか。以下では、大阪市民を対象に実施された社会調査データを用いて、これらの問いに答えていく。

3. データ・変数

3-1. データ

本稿で用いるデータは、大阪市立大学が 2011

年に実施した「大阪市民の社会生活と健康に関する調査」データである。抽出標本は 6,228 人、病気・障害・長期不在・転出を除外した有効抽出標本は 6,191 人である。有効回収数は 3,244 人で、有効回収率は 52.4%であった。調査対象者は、25～64 歳の男女である。

3-2. 変数

3-2-1. 生活保護受給者

以下では、本稿で用いる変数について説明していく。まず、生活保護を受給しているかどうかを捉えるための変数について、説明する。健康調査票の問 3 (1) では、対象者がどの健康保険に加入しているかを尋ねている。そのうち、「生活保護の医療扶助」と答えた者を、「生活保護受給者」とする。有効回答 3,234 名のうち 116 名 (3.6%) が、生活保護受給者であった⁶。分析では、受給者を 1、受給者以外を 0 とするダミー変数を用いる。

3-2-2. 生活保護受給の背景

次に、生活保護の受給に影響を与える社会的・経済的要因について、説明をする。ここでは、属性と、生まれ育った家庭環境について、取り上げる。

属性変数として、年齢、性別、学歴、就業状況、婚姻状況⁷を取り上げる。年齢は実測値で測定し、性別は男性を 1、女性を 0 とする男性ダミーを使用する。学歴に関しては、社会生活調査票の問 28 で「最後に通った（または現在

⁶ 大阪市の生活保護率は、2012 年 1 月時点で、5.7%である（大阪市 2012）。生活保護受給者のなかには高齢世帯が多いが、本稿で用いるデータには高齢者は含まれない。したがって、受給率が低めに算出されるのだと考えられる。

⁷ 生活保護の受給に影響を与える要因として、母子世帯かどうかも重要であるが、母子世帯かどうかを捉える変数がないため、取り上げない。